

Book Review

ENG アトラス

めまい・平衡機能障害診断のために

小松崎 篤 著

著者の小松崎篤先生（医科歯科大名誉教授）は、半世紀にわたりめまい・平衡障害の基礎と臨床に取り組んでこられたわが国の神経耳科学の大家であり、小生が研修医の頃からの師でもある。小生は小松崎先生よりかねてから本書を構想していることをうかがっていたが、A4判 448 ページの大冊の本書を手にして感慨深いものがある。

脳波は 100 年、ENG は 50 年の歴史がある。脳波によりてんかんの脳皮質の電気現象がわかるようになった。ENG は眼振の記録や異常眼球運動の記録により半規管、脳幹、小脳、大脳の病巣を眼球運動の電気現象として記録することで診断に大きな貢献をしてきた。

本書の構成は ENG の「歴史」「原理」「利点と欠点」「記録の実際」「眼振の記録と検査法」「各疾患における ENG 記録所見」に分けて、小松崎先生の豊富な ENG コレクションを例に出して「考えさせる」べく記述している。

本書は症例の ENG 記録を例示し、どのような病態生理が背後にあるか解説しており、その「語り」は「白熱授業」的であり、著者の思いが熱く伝わってくる。昭和 46 年、卒業するや否や小生は東大耳鼻科に入局し、毎週金曜日のめまい外来に参加して勉強した。午

後に患者の診察を行い、フレンツェル眼鏡で眼振を観察し、神経学的チェックの後、夕方の 6 時頃から鈴木淳一先生を中心とした症例検討会が全員で ENG を見ながら行われた。その時、小松崎先生は ENG を誰よりも細かく読み、口角泡を飛ばすという表現がびったりの熱心さであった。夜 10 時になっても終わることのない検討会であった。その後先生はニューヨークの Mount Sinai 医科大学に留学し、サルを用いて橋部の PPRF が急速眼球運動の中枢であることを発見した。先生は特にめまいの中枢の病態の電気生理に詳しく、その解説は魅力に富んでいる。今後、本書のような深読みの ENG の解説書を超えるものを得るのは難しいであろう。耳鼻咽喉科専門医試験には ENG がしばしば問題として出されるので、腰を据えて勉強するのにうってつけの質の高い最新のテキストである。ただし、大脳の局在病巣の ENG 記録と幼小児の回転検査の記録は今回は掲載されていないので続編を期待したい。

東大名誉教授
加我君孝

A4・頁 448 2017 年 05 月
定価：本体 8,200 円＋税
[ISBN978-4-260-02131-9] 医学書院刊